

特集 中世史研究の現状と課題

報告一

山城国禪定寺荘の領域画定と地域

朝比奈 新

はじめに

中世社会の特徴を追求するならば、焦点は、古代の国家的土地所有制の内部から、私的土地所有関係が、どのような形で展開し、中世的諸主体が成立してくるのか、という点に絞られる^①。そのため、中世社会の成立史は、寄進地系荘園の形成過程を軸に展開してきた。今日でも教科書で紹介されている「鹿子木荘」の事例は、荘園の発生を開發に基づくとした戦前の説を、繼承しているといえる^②。開發領主（在地領主）による第一次寄進と、それを受けた本家への第二次寄進によって、開發領主の私領が荘園となる。結果、本家―領家―荘官という支配体系が形成されるという理解である。

その後、永原慶二氏によって、これまでは、開發領主か

らの行為とされてきた寄進地系荘園の性格について、荘園領主権にまで踏み込んだ分析が行われた。寄進主体である在地領主は、「実質的な領主権」の所有者ではないことを論証した。荘園領主は、検田権や年貢地子決定権など、国衙の支配権を繼承したものであることから、これら荘務権は荘園領主側にあるとした。また、荘園制的秩序が本家職・領家職・預所職など「職」の体系によって成立しており、「国家秩序Ⅱ体制」によって保障されていることを明らかにした^③。

しかし、近年、川端新氏によって、寄進地系荘園における立荘の重要性が明らかとなった。その一点目は、院・女院・摂関家などの近臣主導のもと、本来の寄進私領とは規模も構造も異なる広大な領域型荘園が形成される。二点目は、鎌倉時代に入る頃から、荘務権を掌握する領家職が本

家の側から創出し、寄進の連鎖による「職」の体系は、後発的に形成されたという。このことから、院政期における寄進地系莊園の見直しが行われた。莊園領主側による莊園成立の主體的動向の重視が明らかにされ、在地領主からの所領寄進は、立莊過程の手續きに過ぎないとし、「立莊Ⅱ寄進」の図式を否定された⁴。

しかし、川端氏が、指摘する一点目の内容については、課題も残る。立莊時において領域画定を可能にした、在地側の諸条件については言及されていないのである。河音能平氏が、一見、莊園領主の絶対的領有に属するかに見える支配領域が、実は住人たちの政治的共同組織そのものに基礎を持つ⁵、と指摘していたように、莊域は、院・女院・摂関家などの近臣主導だけで決まるものではないはずである。領域画定において、在地側の主体性も意味を持つのではないだろうか。その課題に対して、高橋一樹氏は、莊園化されていく枠組みは、在地社会において、すでに形成されていて、院権力側の需要とうまく接合して、広大な王家領莊園が成立したという見通しを立てられた⁶。しかし、立莊以前からの隣保関係を、実証するには至っていない。そこで、本稿では立莊論では触れられていない、領域画定に至る仕組みを明らかにしていきたい。院などの近臣主導だけでなく、在地側の動向が莊域画定と、如何なる関係にあ

るかということである。そこで、摂関家氏寺である平等院の末寺山城国禪定寺莊を考察対象とする。禪定寺に関して、これまで堺相論や平等院との関係による研究に集中していた⁷。禪定寺莊の領域画定に関する研究はなく、いつどのような形で、画定していったのか明らかにされていない。本稿では、住人間の山野紛争、そして中央と在地社会（都鄙間）の関係に注目し、莊域画定の仕組みについて究明していきたい。

一、禪定寺莊の構造と周縁地域

禪定寺領の展開

禪定寺領は、現在の京都府綴喜郡宇治田原町に位置する、典型的な山間莊園であった。形成過程については、次の史料を参考に説明したい。

【史料1】文保元年二月憚定寺・山城國曾束莊由緒注進状案（『禪定寺文書』六二二）

（前略）

一 當寺藍觴事

本願平崇上人（東大寺別當 正法院々主）去仁平元年九月廿二日當寺別當仁朗阿闍梨、就寺領百町堺、被注進當寺根元、件状云、本願平崇聖人者、頭蜜俱學明德、智行清朗之仁、

常観阿字、毎時従口出金色光、而補別當寺東大之後、此光隠失、仍辞申別當、為懺悔ト私領山野、建立堂宇、安置觀音像、今憚定寺是也云々、仍正暦年中令草創當寺、長保三年（四月八日）□□□□山一十町、被擬常燈佛供修造料所畢、長元二年被寄進（藤原實朝）殿下御祈願所、迄于延久三年「權大僧正御坊（御宇治殿）御代、當寺別當覺勢阿闍梨、被寄進山以下」一畢、其後（藤原忠実）知足院殿御代、被差下家司利元并寺家鑑取則光等、所被打百町勝示也、且寺領一千町并百町四至券文等、

（後略）

禪定寺莊は、正暦二（九九一）年、禪定寺の東大寺別當正法院院主の平崇が東大寺別當を辞し、懺悔として私領であつた山野に、堂を建立し禪定寺を創建した。田園と山を買い取り仏聖燈油に充て、長保三（一〇〇一）年四月八日に畠山一千町を、常燈佛供修造料所とした。（8）長元二（一〇二九）年に藤原頼通の御祈願所に寄進され、延久三（一〇七一）年、藤原頼通息である権大僧正御坊覺円の御代までに、禪定寺別當覺勢阿闍梨が、全ての山以下を平等院に寄進した。理由は禪定寺領内が方々から押領されたため、「御威を募るため」の寄進であつた。その後、藤原忠実の時に、摂関家下家司である利元・鑑取則光等を派遣

し、寺領一千町を百町に縮小して勝示を打った。寄進後、数十年間、山地子檜皮を平等院へ進上し、この檜皮山地子は、三年に一度は禪定寺修理料となつた。（9）

禪定寺莊が百町に画定したのは、「四條宮并（藤原實朝）知足院殿下御時、禪定寺□山被促四至事」（10）とあるように、四條宮・藤原忠実の時代であつた。四條宮とは後冷泉天皇の皇后藤原寛子のことであつた。長元九（一〇三六）年に、太政大臣藤原頼通の娘として摂関家に誕生し、大治二（一二二七）年に九二歳で亡くなつた。忠実からみると大叔母の關係にあたる。藤原忠実は、平安時代後期の公卿で、号は知足院・富家殿とも呼ばれた。康和元（一〇九九）年、氏長者、同二年には右大臣となる。その後、白河法皇との關係を次第に悪化させ、保安元（一一二〇）年一月に内覧停止、事実上閑白を罷免され、以後宇治に籠居した。（11）禪定寺莊百町の画定は、四條宮存命の時期と、忠実が氏長者となつて失脚するまでの期間の重なる、一〇九九年〜一二二〇年の間であることが確認できる。

次に、禪定寺領山一千町の四至についてみる。（12）東は「近江国堺綾槻尾」とあり、近江国界にあつた。南は「国分寺山太讓葉峯」とある。山城国の国分寺は、禪定寺から南にあたる加茂町大字例幣にあることから、宇治田原町の南城は超えていたと思われる。西は「公田」とある。北は「大

禪定寺荘の領域画定と地域（朝比奈）

津尾」とある。禪定寺荘の北側にあたる曾東荘は、禪定寺一千町内の深山を開発して形成していることから、北域は曾東荘を超えた地点になると考えられる。次に、図1を参考に禪定寺領百町の領域をみてみる。養和元（一一八一）年段階では、東は、「大坂ト云う古那 長尾山田路」で、現在の奥山田地区小宇川尻逢坂にあたる。一千町段階では、近江国堺まであった禪定寺領は、奥山田の入口付近にまで縮小していた。南は、「御方至シカラキ路」で、現在の信楽街道にあたる。西は、「高尾小イチ井谷峯（ヒラキカ尾）」で、宇治川の手前までが高尾地区であることから、現在の宇治市志津川地区との堺にあたるか。北は「カケ谷」で、現在の曾東町との堺まで縮小している。

禪定寺領の性格

禪定寺領の性格について、小林一岳氏によって翻刻された「山城国綴喜郡禪定寺惣田数帳」¹³を参考に検討する。禪定寺領として領主から把握された定田総計は八町二段一九歩であった、所当米の総計は、一五石六斗六升三合になる。屋敷数は八七軒あるが、田地の名請人は七三名いる。その中で給田畠と寺社免田の記載に注目したい。給田は、下司給田が五三九〇歩、公文給田が五〇六四歩、名主給田が八四〇歩、職事給田一二七〇歩で、合計は四町一段二六四

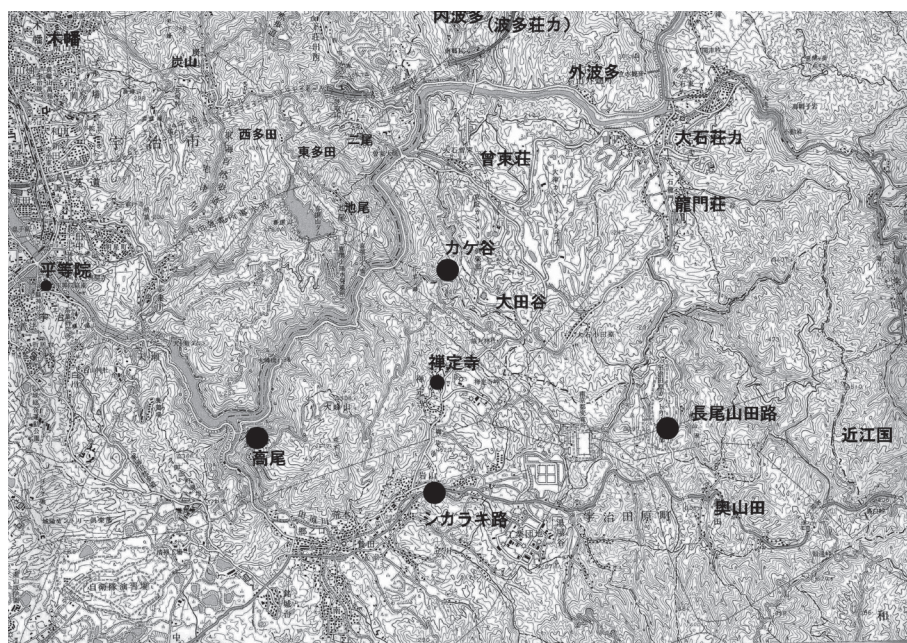


図1 禪定寺荘百町周辺図（国土地理院発行50000分の1地形図「京都東南部」に加筆して使用）

歩である。給畠は、下司給畠が一四六九歩、公文給畠が一五二〇歩で合計が一町程であつた。小林氏は、下司と公文の給田は、百姓の最大田地面積所有者と比較すると三倍以上となり、この二人の荘官が禪定寺領で卓越した地位にあつたと指摘している。寺社免田については、本堂・薬師堂・地藏堂・毘沙門堂・権現の「修理田分」「修正田分」「毎月講田」などが記載されている。合計は七九段四一步で、所当米は三一石三斗二升一合であつた。

このような下司・公文の給田畠などの存在から、禪定寺領内には下級荘官が置かれていたことが確認できる。また寺社免田の存在についても、窪田涼子氏は、荘園制の括りでみれば、撰録・渡領である禪定寺「荘」の在地寺院として、領家から免田を受ける存在としてみることができると指摘されている。^⑪ 詰まる所、禪定寺領は、荘園としての性格を持つていたといえる。その証拠に、禪定寺領は、「且奥山田・曾束・禪定□□・非田原七郷内□□」^⑫とあるように、大炊寮領奥山田・曾束荘と並んで、田原七郷内に含まれず、独立した荘園として地域では認識されていた。平等院公文からも「田原・禪定寺両庄」「當庄」として扱われ、由緒記にも「禪定寺（御）領庄民」と記されるなど、禪定寺を荘園として扱う記事が見られる。禪定寺領は、惣田数帳の内容などから勘案すると、禪定寺荘として認識されていたこ

とになる。

次に、藤原忠実による禪定寺領百町の画定が、禪定寺荘の立荘といえるのか、検証してみたい。まず、禪定寺が百町に画定した一二世紀頃は、川端氏によると、王家領・撰関家領は、院庁・女院庁・撰関家政所からの発給文書で立券が命じられる、と指摘する。^⑬ 太政官符のような国家の認定がなくとも、撰関家政所下文で立荘が可能になる。また、その立荘手続きも、勝示が重視されてきた。佐藤泰弘氏は、一二世紀中期以降では、勝示を打ち、免除特権を付与すること^⑭で領主権を設定するようになると指摘している。^⑮ 畢竟するに、撰関家の家司による禪定寺領百町の勝示打ちは、撰関家領内部での禪定寺領の事実上の立荘だといえる。^⑯

周縁地域の動向

それでは、長保三年段階では、まだ、禪定寺領杣山一千町に内包されていたと考えられる禪定寺周縁地域の、一二世紀以後の変遷を詳しく追ってみることにしたい。

まず、建治（一二七五〜八）年間、禪定寺荘と堺相論を展開していた最勝金剛院領近江国曾束荘から取り上げる。

彼庄目安云、曾束庄者、安泰開發之地也、建立一堂、而号安興寺、彼安泰ハ大和國人也、獵師ニテ鹿跡尋此所ニ来、其時者深山也、伐拂彼山渡住云々、當寺申云、

禪定寺莊の領域画定と地域（朝比奈）

其時深山者、當寺千町之領内也、仍於曾束四至者、雅意謀作之條、就目安増令露頭旨、令申之處、不及一陳、委旨在兩庄目安矣、²⁰⁾

曾束庄は相論の際に提出した陳状の中で、曾束庄の由來を述べている。それによると、曾束は、安泰という大和の国の人が、深山を切り払って開發した土地であつた。獵師をしていた時に、鹿の跡を追いかけて、この地にきて安興寺を建立し、住み着いたということになっている。一方、禪定寺は、安泰が開發した時の深山は、禪定寺一千町の領内であると反論した。この史料から、禪定寺領杣山一千町内での、曾束住人による開發を見いだすことができる。²¹⁾

そして、治安（一〇二一〜二四）年間、太政大臣藤原公季に寄進している。²²⁾甥藤原道長のあと治安元（一〇二二）年、太政大臣となるなど、摂関家でありながら、王族並みの待遇を受けていた。²³⁾このことから、「御威を募る」ための寄進であつたと考えられる。その後、大治（一一二六〜三一）年間以前には、白河院の側近公卿源大納言雅俊へと再寄進されている。²⁴⁾仁安（一一六六〜六九）年間に、曾束庄には官符が出される。²⁵⁾實際は、仁安年間に立荘が實施されたわけではない。曾束庄は、仁安年間、皇嘉門院領と考えられるから、仁安二（一一六七）年、皇嘉門院は封戸を辞し、所領莊園安堵の宣旨を、六条天皇に願って出された

官符と考えられる。²⁶⁾その後、治承四（一一八〇）年五月、皇嘉門院領は、九条良通に譲与されたため、曾束荘も最勝金剛院領として、九条家を領主として仰ぐこととなった。

次に、禪定寺莊の東側に位置する山城国奥山田は、延久（一〇六九〜七四）年間に大炊寮領御稻田として設置される。寛治（一〇八七〜九四）年間には、奥山田山四至内は、大炊寮家の支配とし、小輪谷・鳴谷は、富家殿（＝大石莊）の支配と定められた。²⁷⁾奥山田は寛治年間に、領域形成がみられる。

禪定寺莊の北東に位置する近江国大石莊は、富家殿（摂関家）領であつた。奥山田との間で堺相論を度々起こしている。成立年代は不明だが、奥山田との堺相論で、寛治年間には小輪谷・鳴谷の支配が認められている。寛治年間に、富家殿人としての活動が見えることから、その時期には摂関家を領主とする莊園は、すでに成立していたことになる。²⁸⁾

同じく禪定寺莊の北東に位置する近江国龍門莊については、安元二（一一七六）年から寿永三（一一八四）年までは八条院領であつたことが確認される。²⁹⁾龍門莊は、弘長二年、奥山田莊と大石莊の山野相論の際、大石莊から奥山田莊民と同心していると疑われ、路地で年貢以下薪炭を抑留されている。その時は、田原住人等が仲介に入つて、和与

が成立している。^⑩

曾束莊より、さらに北側に位置する波多莊は、久安四（二一四八）年、藤原忠実が近江波多莊を石山寺に寄進したと伝える^⑪。また、図2『富家殿山絵図』によると、外波多・内波多是石山寺に寄進したが、山野は、富家殿支配であることが確認できる。

以上、摂関家の影響下にあった宇治一帯の中に禪定寺領、杣山一千町は設定されていた。曾束莊が、禪定寺領杣山一千町内での開発により成立したように、禪定寺領周縁には、次々と莊園が成立していった。それに合わせるかのようには、禪定寺莊も百町に定められていったと考えられる。

二、領域画定の構造

領域画定までの動き

まず、禪定寺領が杣山一千町から百町に縮小した経緯を、具体的な提示をすることから始めることにしたい。

【史料2】仁平元年（九月）廿二日禪定寺由緒注進状案（『禪定寺文書』二）

（前略）

而間別當覺勢阿闍梨之時、為募御威、以件杣奉寄平等院後、数十年之間、山地子檜皮并進、件檜皮并件山地

史苑（第七二卷第二号）

子檜皮申給三年一度「^⑫」□□定寺修理料、其後圓朗□□闍梨別當之時、巨倉殿□□□□乱入寺領之山切取□□木、而間平等院執行法□□□□時、訴申政所之處、專當良勢久得巨倉殿御使案□□元等也、^⑬所被定也、其後四至之内、敢無他妨、而件開発波多□□□寺□四五町也、爰知寺家領百町内、慥巨倉殿御領之旨□□也、

（後略）

一二世紀前後、巨倉（藤原忠実）殿領の住人が、禪定寺領内の杣山に乱入して、立木を切り取る事件が起きた。その事態を受けて平等院執行法印が、摂関家政所へ訴え出た。その働きかけによって、藤原摂関家から、下家司利元と鑑取則光が現地に派遣され、禪定寺領内は百町に定められたという。このように、禪定寺領は領主摂関家によって、百町に確定した。その発端は、他領住人の乱入という事態であった。畢竟するに、禪定寺莊の領域画定は、現地の住人間による土地の帰属問題を発端とした堺相論が原因であった。つまり、禪定寺が関わった堺相論の流れを明らかにすれば、領域確定まで至る動きを、見いだすことができる。

幸いにも、禪定寺莊に関しては、一一世紀後半から一四世紀まで、摂関家―平等院―禪定寺―禪定寺寄人という支配関係は変わっていない。在地から莊園領主までの上申ルートには、普遍性があると思われる。そこで、禪定寺莊

が関与した中で、最も史料が残存する曾束莊との相論から検討していくこととする。³²⁾ 相論の発端は、乾元（一三〇二）三）年間に、数百人の禪定寺住人等が曾束莊内の大田谷に乱入したことから始まる。そこで伐木・資財収奪などの行為に及んでいく。³³⁾ この相論で、禪定寺・曾束両莊から、嘉元二（一三〇四）年に、撰関家の氏長者である二条兼基に訴状が提出される。嘉元三（一三〇五）年に、氏長者が九条師教や一条内経に交代したが、その間にも、訴状・陳状が繰り返された。³⁴⁾ 何度か訴訟が中断されたが、元応二（一二二〇）年に、関白家政所下文が出され、堺が画定している。³⁵⁾

この相論の中で、禪定寺・曾束両莊の住人等から、氏長者に堺画定を依頼する上申がみられる。そして、その画定方法も、延慶三（一一三一〇）年四月に、曾束莊沙汰人百姓等側が提出した重訴状に、「被召出両庄差図、御使莅件論所之堺、任実正可有御糺定之條、政道也」³⁶⁾とあるように、両莊が差図を提出後、氏長者の使節が係争地に出向き、実地検分に任せて、正式な堺を画定することが、政道であると主張している。このように、鎌倉時代の堺相論の際は、現地住人の要望に基づいて、氏長者側から使者が派遣される。そして、実地検分により、正式に堺が画定するという流れだと考えられる。

禪定寺莊の上申ルート

どのような経緯で、堺相論から領域画定に至るのだろうか。寛元三（一二四五）年の禪定寺寄人と山城国木幡住人の相論での、上申ルートに着目して考察を加える。木幡は、撰関家の菩提を弔う淨妙寺の所領であるため、両方とも領主は撰関家という構図になる。この相論から、禪定寺寄人の訴えが、平等院を通し撰関家政所まで伝わった経緯がわかってくる。³⁷⁾

相論の内容については、先行研究でも取り上げられるものであり、小保内進氏によって文書の伝達に注目した論稿もある。³⁸⁾ このような研究に依拠しつつ、紛争解決までの具体的な流れを整理してみたい。まず、相論の全体像が把握できる、次の史料をみてみる。

【史料3】 禪定寺寄人等申状案（『禪定寺文書』一八）

（前略）

右件元者、去七日寄人六人令京上候、而木幡住人八人同罷上候之處、於七條河原邊、木幡住人馬与寄人馬走競之間、寄人等沛艾候木幡馬引留候、一切木幡住人不可腹立之處、無左右蹴寄人之尻、又取立頸散散令打候、上下諸人見之、成不思議之思候、然而是者人数少之間、一切不申合、爰木幡住人於于今者、可和平之由令申候之間、其條神妙之由、寄人承諾仕畢、其後置出彼住人

等、待請木幡山、存外令打之剋、一人者被打殺畢、殘同被打損云々、凡正道之憲法御世に、難有程之狼籍也、是則令取寄人廻旋錢之料也、且御堂御建立之以前、^(法成寺)齋然上人自唐被渡進文殊候ケル之時、被奉安置東三條殿、為御香此六人之寄人者、廿人被召付候内ニテ、二百余歳之間、聊モ不成煩之處、無子細被打殺畢、仍有次第之御沙汰、已八人内自聖護院御所、字弥源二・藤四郎者被召出使廳候、忝可被禁獄候、至于字中六男、座主御房御祇候人之所從ト号、不被出之條、難堪之次第也、正道憲法之御世、争々殺害無誤寄人等、無其誠哉、若無御沙汰者、二百余歳之勤不及勤仕、仍言上如件、

寛元三年十二月十八日 禪定寺寄人等上

相論は、寛元三年二月七日、禪定寺寄人六人が、京に向かう途中、木幡住人に乱暴をうけることから始まった。それだけでは終わらず、帰路では、待ち伏せした木幡住人に襲われ、二人が殺された。目的は禪定寺寄人の錢の強奪であった。同日、禪定寺寄人等から平等院公文阿盛に報告がいく。阿盛から、木幡住人を支配していた木幡淨妙寺執行御房宛に書状が出され、下手人の引き渡しを要求する。翌日、禪定寺寄人から、平等院末寺住鑑取友成宛に申状が出され、事件の経過報告と、犯人引き渡しがなければ、今後寄人は、一人も所役を勤めないと主張する。同日、それ

を受けた禪定寺鑑取友成から平等院公文阿盛に申状が出される。さらにその内容が、公文阿盛から平等院長吏僧正御房（長吏政所土佐寺主定舜）を通して、同月一〇日、二条良実へ申状が進上される。本来は、「執行御房他行候之間、依急事直令言上候」とあるように、平等院の公文から執行を通して、長吏や撰閑家に伝えられるはずであった。同月一二日も、同じ経路で二条良実への上申が行われた。⁽³⁾一七日、殿下（二条良実）↓平等院長吏僧正御房政所土佐寺主定舜↑阿盛という流れで書状が下達されている。

この上申に関わっていた人々について、具体的な検討に移る。【史料3】でみたように、禪定寺寄人は、禪定寺建立以前からの由緒がある。藤原兼家が建立した東三条殿文殊堂寄人二〇人の子孫であった。そして、禪定寺が平等院末寺になってからは、平等院に御香を納めるようになる。文殊堂御香寄人二〇人の子孫が中心となって、上申していたのではないだろうか。

鎌倉後期の「禪定寺惣田数帳」を分析された小林氏によると、禪定寺荘内には、百姓の屋敷数は総計で八七軒であった。屋敷地面積で二〇〇歩を超える家は一三軒あり、逆に一〇〇歩未満の面積の屋敷は三七軒存在していた。最大で三七〇歩の面積をもつ百姓も存在し、最も面積の小さな屋敷が三〇歩であることから、一〇倍以上の差があった。畠

禪定寺莊の領域画定と地域（朝比奈）

地の面積も、七一五歩を最高に、四〇〇歩を超える所有者が一〇名であるのに対し、一〇〇歩未満の所有者が二八名いる。田地についても、名請人の総数七三名の内、五〇〇歩以上の所有者が二三名、そのうち一〇〇歩以上の所有者が七名も存在した。逆に二〇〇歩未満の所有者は二七名おり、一〇〇歩未満の所有者は、一二名存在していた^①。このことから、鎌倉後期の禪定寺領の住人間には格差が見られる。屋敷地や畠地・田地の面積を多く所有する人物が、禪定寺領の有力百姓であり、【史料3】でみた禪定寺寄人であった、と見るべきであろう。

平等院側の人物の内、鑑取については、「平等院末寺之住鑑取友成」とあることから、現地において禪定寺領を管理する莊官の一人であると考ええる。百町に領域が画定した際、摂関家の下家司とともに、鑑取が現地で実際に勝示を打つ立場にいた。平等院公文は、執行や三綱の許で寺務に当たり、一三世紀段階では同族の者がその地位にあり、平等院が末寺禪定寺及び寄人を支配する上で、実務責任者の地位にいたことが、明らかにされている。長吏は、平等院貫首の検校と、その下にいる別当・権別当の中で実務を執る立場の者が執印（長吏）と呼ばれる。しかし、摂関家による寺院修造・仏事運営・寺領経営などの氏寺経営は、執行を介して行われていたことが明らかになっている。ま

た、【史料2】でみたように、禪定寺莊が百町に画定する際、当時の平等院執行による摂関家への働きかけがあった。摂関家への上申は、執行の存在が大きいといえる。そこで次は、平等院執行に注目し、領域画定に果たした役割を検証していきたい。

平等院執行の役割

禪定寺莊の領域画定は、一〇九九年～一二〇年の間であった。摂関家政所に訴えたのは、平等院執行であった。その平等院執行は、長治元（一一〇四）年には平等院の修理別当職にいた成信だと考えられる^②。修理別当について、平等院では「平等院之習、非執行為修理別当之例無之」^③とあるように、執行の職でなければ、修理別当の職に就く先例はない。そのことから、修理別当であることが、必然的に執行の地位にいたことになる。その後も、天永二（一一一一）年「平等院仰成信、法成寺仰真覺、各執行人也」^④とあるように、平等院執行としての活動も見られる。禪定寺莊百町成立の時期の平等院の執行は成信である蓋然性が高い。長治二（一一〇五）年には「於宇治平等院者仰成信了、法成寺仰寺家、法性寺又同、京極又同」^⑤とあるように、藤原忠実からの命令が、法成寺・法性寺・京極殿御堂は寺家宛に下されたのに対し、平等院については、成信

に直接下されていた。藤原忠実と成信との親密な関係が窺える。成信は永久五（一一一七）年に亡くなるまで、修理別当・執行職を勤めていた。^④

次に、成信と藤原撰関家との関係に注目したい。藤原寛子は病氣療養のため、嘉承元（一一〇六）年正月一四日から長期にわたって、成信の屋敷である五条房に滞在していた。その間、忠実は、藤原寛子を見舞うために立ち寄っている。忠実祖母の北政所も、度々成信五条家に滞在していた。^⑤それを忠実が見舞うことで、成信の屋敷に訪問する機会が増える。忠実は五条の成信房の他、宇治の成信房に、『殿暦』で確認できるだけでも四〇回程立ち寄っている。このことから、成信と藤原寛子・忠実との密接な関係が裏付けられる。

次に、成信の寺領への関与を窺わせる史料をしてみる。

去夜半許宇治平等院並法成寺修理別当法橋成信死去云々、此両三年有病氣上、此受重病云々、依年来平等院執行勤、所知庄園彼僧男三人に分預、存生時此之由告示也^⑥

成信が亡くなった際、平等院領の荘園は成信の三人の息子に分け預けられている。このことは、成信の生前から、関係者には周知されていた。また、長治元年一〇月五日には、「於宇治四至之内熊野先達鬭乱、而修理別当成信男共

二人皆悉擲了、件先達本数八人也」^⑦とあるように、藤原忠実の宇治領内に、熊野先達が鬭争した。そのため、成信の男二人が、熊野先達を皆捕縛している。この二つの事例からもわかるように、平等院は成信の一族によって経営されていたと考えることができる。^⑧

執行による寺領への関与について、樋口健太郎氏は、平等院と同じ氏寺の東北院執行による寺領支配の例をあげている。その内容は「多年吳庭御庄住人等耕作之處、當執行法眼時、又下司永仁致其妨之尅、自故領主右大臣殿令言上故入道殿下之時、被仰當執行法眼天所取口寺家下文也」^⑨とあるように、東北院領山本庄内にある院御願寺法華堂御領吳庭庄一町八反を、山本庄の下司永仁が妨害してきた。そのため、吳庭庄住人等は領主右大臣を通して藤原忠通へ言上した。現地へは、藤原忠通から、東北院執行信慶に命じて寺家下文が発給された。藤氏長者藤原忠通の命令は、執行を介さなければ現地には通達されないものである。このように、撰関家氏寺は、執行が寺領の管理責任者であったことを明白に物語っている。

以上のように、禪定寺荘は、平等院執行である成信が、撰関家政所に訴えたことで百町に画定した。成信一族は、藤原忠実や藤原寛子など、撰関家との間に太い人脈を持っていた。また成信一族は、寺領を私的に譲渡できることや、

禪定寺莊の領域画定と地域（朝比奈）

莊園の管理責任者であったことから、在地社会との関係も深い。平等院執行一族は、中央と在地社会を紐帯する存在であったといえる。

三、領域形成の原理

境界の正当性

堺相論を契機として、どのように莊域が画定されていくのか、禪定寺と曾束の堺相論の事例から検証を行うことにしたい。まず、史料上の記載を抜き出すと、次のようである。

（前欠）^{（藤原忠実）}知足院殿下御代、下家司利元・鑑取則光等、

苅堺被打勝示畢、差図又以彼被為本、所詮任 殿下嚴

重御勝示、被注之差図与、就土民胸臆之說、被注差図、

輕重用捨、偏仰上裁、訴論肝要、專在于此一段矣、^⑤

この史料は、正和四（一一一五）年に、禪定寺莊と曾束莊の堺相論において、禪定寺寄人が、寺領の正当性を主張した陳状の一部である。この中で、寄人側は、禪定寺領の莊域は、一二世紀前後の藤氏長者藤原忠実によって、画定されたことを由緒として示している。しかし、この主張は、禪定寺莊と曾束莊の相論が始まって、一〇年以上経過した後証として提出されている。

それ以前は、「被召出両庄差図、御使苅件論所之堺、任

実正可有御紇定之條、政道也、傍例也」^⑤とあるように、曾束莊は、禪定寺・曾束両莊が絵圖面を提出後、撰関家の使者による実地検分を要求している。それに対し、禪定寺側は、「先以両口文書可被紇明理非云々」と、両莊の所持する文書の内容をもつて堺を画定するよう求めている。禪定寺側が、差図の校合と実地検分を避ける背景について、小林氏は、係争地を禪定寺側が押領、つまり当知行していた。そのため、実地検分という危険を冒すより、当知行を前提に、文書による現状凍結の形で堺画定を狙ったと説明されている。^⑥詰まる所、禪定寺寄人側としては、藤氏長者藤原忠実による百町の莊域画定という由緒よりも、現地住人等の実力による当知行を優先していたことになる。

しかも、藤原忠実の画定した莊域は、一四世紀前半の藤氏長者の判断材料にはならなかった。元応二（一三二〇）年、藤氏長者の関白一条内経家政所下文では、阿盛注進の延応差図に記載された、堺の順守という裁定が下された。差図とは、延応（一二三九〜四〇）年間に、当時の平等院の公文であった下野前司阿盛が中心となつて作成した絵圖と考えられる。この差図は現存していないが、一四世紀段階では、平等院宝蔵に納められていた。

このように、一四世紀前後の、禪定寺と曾束両莊の堺相論においては、一二世紀頃の、藤氏長者藤原忠実による堺

画定という由緒は、意味を持たなかった。裁定の根拠とされたのは三点考えられる。一つ目は、禪定寺寄人等にとっては、藤原忠実による荘域の画定という由緒は、当知行ほどの正当性を持たなかった。二つ目は、一条内経による裁定では、藤原忠実の勝示は問題にされなかった。裁定の判断材料となったのは、延応以来の堺を示した絵図であった。そして三つ目、延応以来、両荘の係争地における、曾束荘住人等の生活基盤の存在があげられる。そのことは、

去乾元之比、□□□住人等率数百人之勢、帶弓箭兵杖、始而打入當庄内大田谷、伐取□□、破損炭竈、追捕在家、奪取資財、剩令打擲刃傷百姓等之段、

とあるように、乾元年間に、数百人の禪定寺住人等が、曾束との係争地である大田谷に乱入し、山木を伐り取り、炭竈を破壊し、民家を奪い取り、資財を奪い、そればかりか百姓等に対し刃傷に及ぶ事件があった。禪定寺住人による大田谷への乱入は初めてであることから、乾元年間以前は、大田谷にはすでに曾束荘の住人が、生活していた点に注目したい。延応以来、係争地である大田谷には、曾束荘の住人等が炭竈で木炭を生産し、民家も存在していた。曾束荘住人の生活基盤があった。そのことが一条内経家による裁定で考慮されたものと考ええる。

境界の選定

地域住人の生活基盤が、荘域の正当性を高める根拠になることが、前節から見いだすことができた。この事実を手掛かりに論を展開することにした。それでは、どのような場所に境界は設定されるのだろうか。まず、一二世紀前後の、禪定寺領百町画定時の四至から検討する。東の堺は「東限古郡^{大阪ト云}、長尾山田路」、南の堺は「南限御方至シカラ^{ヒラキカ尾ト申ス}キ路」、西の堺は「西限高尾小イチ井谷峯」、北の堺は「北限力ケ谷^{カタニニ}槁高峯^{ラタミチ}、在御方至」、南東の堺は「限丑寅新女院御庄堺、在□方至」であった。四至は、道と谷である点に注目したい。一一世紀前半の藤原頼通の時と考えられる禪定寺領柚山一千町の四至が、東の堺は「近江国堺緩槻尾」、南の堺は「国分寺山太讓葉峯」、西の堺は「公田」、北の堺は「大津尾」である。比較すると、堺の対象に大きな差異がみられる。一一世紀前半の堺が峯と尾であったのに対し、一二世紀では谷と道で表記されている。谷が領域に記載されたのは、田地開発に適した場所であったためではないだろうか。

元々、禪定寺一千町内であったこの地域では、堺が谷単位ということとはよくみられる。この点に注目して、具体的な提示をすることから始めたい。

禪定寺莊の領域画定と地域（朝比奈）

【史料4】後嵯峨上皇院宣案（『禪定寺文書』四六）

大炊寮供御人と富家殿人相論奥山田山事、於寛治政所下文・仁平高陽院廳牒四至内。^山者、可為寮家之進退、於小輪谷・鳴谷者、任法家勘状、富家殿可令進止、兼又入部山之時者、両方相互可濟率分之由、可令下知給者、院宣如此、以此旨可令申入給、仍執達如件、

三月十三日

左大弁^{兼卿}経俊

謹上 兵部卿殿

【史料4】は、弘長二（一二六二）年、近衛家司兵部卿平時仲宛の院宣である。一一世紀段階では、禪定寺領奥山一千町内に含まれていた奥山田山は、寛治（一〇八七～九四）の政所下文と、仁平（一一五一～四）の高陽院庁牒によって、大炊寮領奥山田と富家殿人（摂関家領大石荘人）との間で、堺が画定していくこととなる。四至内の山は、大炊寮家が支配、小輪谷・鳴谷は、富家殿が支配するという、谷単位での細かい境界の画定が行われていた。

また、東京大学史料編纂所所蔵の特殊蒐書「正親町本」の内に含まれている「山城国富家殿山絵図」にも、堺の場所^⑤は詳細に明記されている。この「富家殿山絵図」は、旧禪定寺領奥山一千町からは、宇治川を挟んだ西側一帯が描かれている。「山絵図」は、史料編纂所によりトレース図が公表されている^⑥。そのため、この図2のトレース図を手

掛かりに論を展開することにした。

まず、このトレース図には、「ウ 外波多」と「エ 内波多」の場所が、「a・b 山富家殿之人進止」と注記されている。山は富家殿（摂関家）の領内とある。また、外波多と内波多との間には★印があり、その注記には、「石山寺御寄進仍於山者于今富家殿知行所役在之」とある。この地域は、石山寺に寄進されてはいるものの、山については、藤原摂関家の知行であることがわかる。この地域が石山寺に寄進されたのは、「石山寺年代記録」久安四年条によると、「閏六月摂政関白大政大臣忠実公^{富家殿下卿}御参詣、被寄進當國波多庄」とあり、久安四年に、藤原忠実によって寄進されたことがわかる。元々、「ウ 外波多」・「エ 内波多」は摂関家領波多庄であった。久安四年以降、波多庄は石山寺領となったが、山については引き続き摂関家領であったことが確認される。

次に、「サ 池尾」・「シ 東多田」・「テ 西多田」^⑦の位置については、それぞれ、「富家殿 d・e・h」の注記がある。この地は現在の宇治市の池尾地区にあたる。「池尾」の地名は『今昔物語』や、文明一〇（一四七八）年には、近衛家領として見えることから、一二世紀以前から中世を通して、集落として存在していた。絵図の中で、この地には、多くの耕地や建物が描かれている。室町期の集落

(近藤成一ほか「荘園絵図調査報告書 11」『東京大学史料編纂所研究紀要 第6号』より転載。)

禪定寺莊の領域画定と地域（朝比奈）

遺跡の存在が確認され、多田源氏の祖である源満仲伝承もあることから、一定規模の集落と耕地の存在があったとされている。⁽⁶⁴⁾ 現地で聞き取り調査をおこなった窪田氏によると、昔は千枚田といわれる大規模な水田が、開かれていたということである。⁽⁶⁵⁾ 富家殿領である「c」が記載されている地域の「コ 牛打谷」についても、醍醐寺領である「炭山二尾」との境界に位置し、谷が醍醐寺領と富家殿領池尾の堺と考えられる。

このように「山絵図」では、石山寺領となった後も、山だけは摂関家領とされた事例や、大規模な集落・耕地や開発適地である谷などが、摂関家領であることが確認される。なぜ、【史料4】の谷単位での堺の画定や、図2の「富家殿山絵図」での複雑な領域設定が行われたのだろうか。禪定寺周縁地域の特徴から考えてみる。禪定寺莊が、領主平等院へ納める所当米は、「山城国禪定寺惣田数帳」によると一五石程であった。禪定寺莊は広大な杣山を領有していたため、所当米以外からの収益の割合が高かった。その領主へ運上された品目は、綿四五両（九貫文として代錢）、粟八石九升五合、御薪六〇〇束、御節薪炭九〇籠、御箸木毎月□□□、歳末御雑事□の中に羊歯・譲葉・蕨等が一〇連、沙汰人御節料□餅が小餅五〇枚・鏡餅一枚等であった。窪田氏は、これら運上物を領主平等院に対する公事であ

るとし、上納と引き替えに、在地は杣山の用益権を獲得していたと考えている。さらに広大な杣山を含む禪定寺莊では、寺の用材に利用する樹木の管理は、禪定寺の住僧が責任を負っていたが、実際に作業にあたるのは住人であると指摘する。これは禪定寺造営に掛かる経費の一部が、杣山を整備し造営の材木を切り出している住人に対して、禪定寺側から支払われている、とみているからである。また、禪定寺莊の住人等は、寺の用材だけでなく、山の産物を売る流通ルートを持っていたと指摘する。⁽⁶⁶⁾

このように、禪定寺莊の住人等にとって荘内の杣山は、管理・伐木・製材など労力によって、対価を得ることができ、山の産物を消費地へ売るための重要な場所であった。つまり、日頃からの用益権がかかる空間を、荘域に含む要望は、当然領主にしていただであらう。京都にいたる荘園領主が、複雑な谷単位までの地形を、把握していたとは考えにくい。やはり、詳細な領域設定は、在地側の生活実態が影響し、住人の要望が反映された結果であるといえる。

住人間による領域設定

次に、荘園領主が定めた領域より、地域住人の生活実態が、優先される事例をみていきたい。紹介するのは、禪定寺領杣山一千町内に成立した、禪定寺莊周縁の荘園間の堺

相論の史料である。内容は、すでに酒井紀美氏の研究^⑦で知られているが、簡単に相論の流れを説明する。

依大石庄と奥山田庄山野相論事、當庄民令同心于奥山田庄之由成疑心、令阿党當庄民、打止路次、令抑留御年貢已下炭薪等之間、雖令訴申事由、於自今以後者、任先例、兩方不可違乱之由、書起請文、令和与者也、

弘長二年大石庄と奥山田の山野相論の際に、龍門庄民が奥山田庄と同心していると、大石庄が疑い、龍門庄民の年貢以下薪炭等を抑留した。この大石庄民と龍門庄民との山野相論に対し、田原と大石の住人が仲介に入った。その経緯は、次の史料から確認できる。

田原住人右衛門尉・同住人馬允・同子息兵衛尉・左近入道^{此ハ大石庄ハ大}入天十月廿六日ニ田原之衛門尉^{（以下カ）}口りの使者ヲ、龍門へつかはして申候やう、和与せさせに可罷越之由申遣之、但廿七日ハ田原の御堂のムネアケ^{（棟上）}ニテ候へハ、廿八日ニハ可罷越之由申之、十一月六日件住人等、衛門尉・馬允・兵衛尉・左近三郎・進士・武藏房等龍門へ立越申者、大石庄民等^{（以下カ）}和与之状ヲ不出者、殿人等ヲヌキテ、龍門庄土可為同心由申、次同十六日ニ彼輩等大石庄三出来、龍門庄民等ヲ境ニ寄合テ、和与状出テ、

十一月六日には、仲介役の田原衛門尉等住人等（衛門尉・馬允・兵衛尉・左近三郎・武藏房等）が龍門庄へきて「も

し、大石庄民等が和与の書状を出さなければ、富家殿本殿人等の身分を捨てても龍門庄に協力する」と伝えた。その脅しが効いたのか、一六日には、仲介役の田原衛門尉等住人等が、大石庄に向向いて、龍門庄民等を大石庄と龍門庄の堺に集めて、和与状を作成し和解が実現した。

この事件の発端は、弘長二年二月、大炊寮領奥山田と大石庄との、堺相論であったと考えられる。三月に「後嵯峨上皇院宣」が出され、寛治の政所下文と仁平の高陽院庁牒に、記載されている堺を、順守することが両方に伝えられた。しかし、その堺を無視して奥山田住人が、大石庄側へ侵入してきた。そのような状況下で、大石庄が、龍門庄の年貢以下薪炭等を抑留した。田原郷一帯で起きたこの相論に対し、管轄する役目の近衛殿御領田原郷山司忠能は、近衛家へ参上し、事態の報告を計画していた。しかし、その時、田原住人による仲介が進行していたため、事態が鎮静化するまでは、参上を控える態度をとった^⑧。

このことから、二つの事が明らかとなった。まず一つ目は、田原住人等は、寛治・仁平年間に、莊園領主によって画定された堺を否定していた。同じ富家殿人であるはずの大石庄民ではなく、堺を超えて進入した奥山田住人と親しい、龍門庄民を支持していたからである。これは、近隣住人等にとって、一世紀以上前に、莊園領主が定めた堺は、

禪定寺莊の領域画定と地域（朝比奈）

現実の生活実態と乖離していたものと見るができる。二つ目は、山司忠能は、田原住人仲介の和解が成立するのを待って、領主に対して事後報告を計画していた。莊園領主への報告よりも、在地による和解成立を優先させていた。

在地住人の動向に対し、莊園領主側は、弘長三（一二六三）年一月一二日、近衛家司平時仲（安居院・兵部卿）から高倉（平等院校校増忠・近衛家実息）殿への書状の中で、現地の莊官へ、事件の真偽を確かめるよう依頼する。高倉殿家から出された、富家殿沙汰人宛書状には、

（前略）

大石殿人等与龍門庄民和与間事、安居院殿よりかくおほせ下され候、この事^{（沙汰）}のしたいいはれなく候けり、其故ハ龍門より和与すへきよしを、田原住人を縁にて、しかとおほしめされんと之人に、如令申状者、右衛門尉已下大石殿人等わよの状をいたさすは、庄人をぬきて、りうもん^{（龍門）}と同心すへしと申て候事、いはれなき事に候らへ、所詮大石大進房、田原庄官をまいれとおほせつかはし候へく候、これにて御問答候、安居院殿へも申させ給候、六波羅殿の御返事をも申仰きた候へきよし候也、恐々謹言、

正月十二日 有綱

とある。近衛家司平時仲（安居院）は、大石莊民と龍門莊民が、和解をした事を非難している。その理由は、龍門莊民から和与状を出すべきところを、大石殿人に、右衛門尉以下が、「大石莊民が和与状を提出しなければ、同じ富家殿本殿人身分を捨てても、田原住人は龍門庄に協力する」と詰め寄った事であった。そのことが、現地の大石大進房と田原莊官の近衛家への召喚を命じる事態になったと考える。

在地側からの事後報告に対し、当然領主側は現地住人の行動を非難している。田原住人にとっては「近所の儀」によつて仲介に入っただけかもしれない。しかし、その内容は領主側の意に沿わないものであった。領主間の境界認識よりも、現地住人の生活実態が優先され、境界が変更される形で、和解は成立したと考えられる。

在地の住人が、このような行動に出た背景について、もう少し詳しく追ってみることにしたい。

當口寺^{（當口寺）}寄人者、本願御時御寺も御建立□候之□前ニ、自唐文殊渡御之間、東三條殿^{（東三條殿）}尔文殊堂ヲ建立候テ、規模ニ被思食候ケル時ニ、何事カ勝世テ可為号所之由令存候之間ニ、此御事コソ目出思食ナレトテ、廿人之寄人捧引文、令參候之間ニ、直入見參、及子々孫々、号文殊堂文殊堂之寄人、不可有他^{（異書、異筆）}所煩之由蒙仰了^{（入用）}了、

禪定寺御香寄人は、禪定寺建立以前の由緒がある。藤原兼家に直接見参した、東三条殿文殊堂寄人二〇人の子孫であった。さらに、次の史料からは、

【史料5】東三条殿文殊堂御香寄人由緒書案（『禪定寺文書』三二）

一 禪定寺住人東三條殿。（文殊堂）御香寄人ト「（号スルコ）」

ト當寺建立以前云々、然者禪定寺ト云事ハ、御寺号ナリ、當寺建立以前當庄名字、尤不見、但縁起ニハ、久和利郷ト書ケリ、

一 正暦二年（卯辛）本堂建立ヨリ、至于嘉元二年（辰甲）三百十四年歟、

一 永承七年（壬辰）平等院御建立（禪定寺建立以後、經六十二年歟）自永承七年、至于嘉元二年（辰甲）二百五十三年歟、

一 延久三年奉寄當寺所領於平等院ヨリ、至于嘉元二年二百三十四年歟、平等院建立以後二十一年歟、當寺建立以後八十一年歟、

一 東三條殿文殊堂寄人号（ト脱カ）スルコト、憚定寺建立以前ナレハ、三百廿余年ナリ、嘉元二年（辰甲）八月廿六日はヲ記置者也、

是ハ嘉元二年（辰甲）八月■記之也、

最初の一つ書では、禪定寺寄人は、禪定寺建立以前は、久和利郷の住人であった。その久和利郷の住人が、東三條

史苑（第七二卷第二号）

殿文殊堂御香寄人となり、禪定寺建立後は、禪定寺寄人となった。二つ目以降では、禪定寺建立や平等院建立より、文殊堂御香寄人の由緒の古さが強調されている。久和利郷住人という生活感覚や、東三條殿文殊堂御香寄人という身分が、領主の裁定した領域を、否定する結果につながったのではないだろうか。

おわりに

禪定寺莊百町画定の契機は、地域住人間の堺相論に帰結することができる。そのため、堺相論を具体的に追うことで、領域画定にまで至った経緯がみえてきた。現地で相論が起きると、その日のうちに、禪定寺寄人―禪定寺住鑑取―平等院公文にまで伝わる。公文からは平等院執行を通して、摂関家政所に訴えが届くシステムになっている。そして摂関家から使者が現地に派遣され、領域が画定する。

中央に目を向けるならば、禪定寺莊の百町画定時には、平等院執行による摂関家への働きかけがあった。その平等院執行成信は、摂関家氏長者の藤原忠実等の身辺にいて、中央政界と深いパイプを持っていた。また、平等院を一族で経営し、平等院領莊園の管理責任者でもあった。つまり、中央政界と在地社会とを紐帯する存在であった。領域画定

には、このような摂関家の身辺にいる成信の存在が不可欠であった。

一方、在地側に目を向けると、現地での莊域の正当性は、住人の生活基盤が重視されていた。つまり、摂関家の氏長者によって、画定された莊域よりも、炭窯や民家といった生活基盤の存在が正当化されていた。禪定寺莊周縁の地域での境界は、谷単位で設定され、「山絵図」でも複雑な領域設定などがみられた。京都にいる莊園領主側が、山間部の谷を一つ一つ詳細に認識しているとは考えにくい。杣山や谷を熟知する現地住人の生活実態が影響し、住人の要望が反映される形で、莊域は画定していったとみるべきであろう。

現地住人の要望が莊域の形成に反映される理由は、禪定寺の有力な住人（寄人）は、領主禪定寺・平等院よりも、はるかに古い由緒をもつ存在であったことがあげられよう。そのことは、奥山田と大石との堺相論の際、地域住人が一世紀以上前に、領主によって画定した莊域よりも、実際に、住人間で現在利用されている領域が、支持されたことから明らかであろう。現状の生活実態に沿わない境界であれば、領主に断ることなく、住人間で領域が決定されていく。それが莊域の形成にも影響を与えていったと考える。

以上、禪定寺莊の領域画定を、在地側との関係から考察を加えた。一二世紀初頭、禪定寺莊百町の領域画定で、中心となったのは、摂関家の身辺にいた平等院執行であった。これは、川端氏が言うような立莊推進勢力の院近臣などと、同じ役割を果たしているように見える。しかし、実際には、地域住人間による堺相論が契機であり、執行は単に現地住人からの要望を、摂関家に伝えるパイプ役であった。率先して、禪定寺莊の領域画定を、主導していたわけではなかった。そのことは、莊域の設定からもみえてくる。その境界は、京都の莊園領主では、到底把握できないような、住人の生活実態が複雑に反映される形で設定されていた^⑤。堺相論でも、領主による境界よりも住人間の生活実態が優先されたように、莊園の領域は、一度画定しても、中世を通して、そのまま固定されるものではなかった。在地住人間の紛争によって、その都度、確認され変化していくものであった。立莊論では、院などの近臣層の主体性が重視されていたが、在地側に目を向けるならば、立莊・領域画定というもの^⑥が、紛争を解決させる働きを果たしていた、莊域の画定は、地域住人によって規制される形で、進められていたと見るべきではないだろうか。

注

- (1) 永原慶二『日本の中世社会』（岩波書店、一九六八年）。
- (2) 中田薫「王朝時代の庄園に関する研究」（『法制史論集』第二巻、岩波書店、一九三八年、初出一九〇六年）七二—二九五頁。
- (3) 永原慶二「庄園制の歴史的位置」（『日本封建制成立過程の研究』岩波書店、一九六一年、初出一九六〇年）。
- (4) 川端新「院政初期の立荘形態—寄進と立荘の間」（『庄園制成立史の研究』第一章、思文閣出版、二〇〇〇年、初出一九六六年）二一—四八頁。鎌倉佐保「川端新氏の庄園制成立論と『寄進地系庄園』論—寄進と立荘をめぐって—」（『日本中世庄園制成立史論』付論、塙書房、二〇〇九年、初出二〇〇二年）二八九—三〇七頁。
- (5) 河音能平「中世社会成立期の農民問題」（『中世封建制成立史論』東京大学出版会、一九七一年、初出一九六四年、一六二—一六三頁）は、上層農民たちが、在地領主に対抗するための、政治的共同組織を形成する場として、定住領域Ⅱ地域村落の存在を指摘している。それらは、特定の権門寺社への寄人化によってはじめて成立することができたと論じた。つまり、権門寺社の庄園制的支配の領域は、地域住人の生活領域であったということがいえる。入間田宣夫「鎌倉前期における領主制的土地所有と『百姓』支配の特質」（『百姓申状と起請文の世界』、東京大学出版会、一九八六年、初出一九七二年、一七六頁）は、領域の形成は、対立する二側面からなっていると指摘している。一方は、在地領主の百姓支配の確立過程、他方は、住人・百姓等による村落結合の過程、庄園領主・在地領主の支配に

対する下からの規制力の形成過程であった。

- (6) 高橋一樹「王家領庄園の立荘」（『中世庄園制と鎌倉幕府』第二章、塙書房、二〇〇四年）九七—九八頁。
- (7) 中村直勝「庄園の研究」（中村直勝著作集第四巻、淡交社、一九七八年、初出一九七七年）。森本米一「文書を中心とした禅定寺史談」（『宇治田原町史 参考輯五』一九七八年）。黒田俊雄『日本中世封建制論』（東京大学出版会、一九七四年、初出一九六一年）。源城政好『京都文化の伝播と地域社会』（思文閣出版、二〇〇六年、初出一九七四年）。藤本孝一『中世史料学叢論』（思文閣出版、二〇〇九年、初出一九七二年）。小林一岳①「山野紛争と十四世紀地域社会—山城国禅定寺・曾束荘紛争をめぐって—」（『藏持重裕編』中世の紛争と地域社会、岩田書院、二〇〇九年）。小保内進①「鎌倉期の富家殿」（『国史学』一八〇、二〇〇三年）。同②「平等院公文の活動—禅定寺との関わりからみる」（『古文書研究』七〇、二〇一〇年）。『日本中世における紛争と秩序形成に関する研究—山野紛争関係史料の収集と体系化』（平成一八—二一年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書（課題番号18520514））。小林一岳②「中世の禅定寺領について」（藤本久志編『京郊圏の中世社会』高志書院、二〇一一年）。櫻井彦「禅定寺と周縁地域」（同前）。藏持重裕「禅定寺領の山野と村人」（同前）。窪田涼子「寺社造営にみる禅定寺在地社会の動向」（同前）。『宇治田原町史』一卷（一九八〇年）。
- (8) 乾元二年三月禅定寺修造言上状案（古代学協会編『禅定寺文書』三〇、吉川弘文館、一九七九年）。以下同書所収文書は『禅』と表記する。

禪定寺荘の領域画定と地域（朝比奈）

- (9) 仁平元年九月二二日禪定寺由緒注進状案（『禪』二）。
- (10) 養和元年一月二一日禪定寺領四至注進状案（『禪』三）。
- (11) 元木泰雄『藤原忠実』（吉川弘文館、二〇〇〇年）三〇—九〇頁。
- (12) 前掲注（10）史料。佐竹昭広『酒吞童子異聞』（岩波書店、一九九二年、初出一九七七年）は、「千町」は「禪定」であり、高山の頂上を意味する修験道関係の語彙であると指摘する（三〇—三二頁）。
- (13) 小林前掲注（7）②論文、一五—四九頁。
- (14) 窪田前掲注（7）論文、一〇八頁。
- (15) 貞永元年八月一八日某下文案（『禪』一一）。
- (16) 建久七年八月山城国田原荘・禪定寺山堺実検状写（『禪』五）等。
- (17) 川端前掲注（4）論文、四一頁。
- (18) 佐藤泰弘「立券荘号の成立」（『日本中世の黎明』京都大学学術出版会、二〇〇一年、初出一九九三年）一三五頁。
- (19) 忠実期の摂関家領の形成については、義江彰夫「摂関家領相続の研究序説」（『史学雑誌』七六—四、一九六七年、八一—三三頁）に詳しい。
- (20) 文保元年二月憚定寺・山城国曾束荘由緒注進状案（『禪』六二）。
- (21) 僧湛慶讓状（「願成寺文書」「平安遺文」二八〇九）にもみられるように、曾束荘と禪定寺荘の、主張内容は異なるのは、私領柚山の開発権が、関係していると思われる。
- (22) 前掲注（20）史料。
- (23) 保立道久『平安王朝』（岩波書店、一九九六年）一六七頁。鎌倉佐保「近江国柏原荘の成立過程——一世紀における

る私領形成の特質——」（『日本中世荘園制成立史論』第一章、塙書房、二〇〇九年、初出二〇〇一年、五四—六三頁）で、柏原荘の形成過程における、閑院流藤原氏の関与について指摘されている。

- (24) 前掲注（20）史料。
- (25) 前掲注（20）史料。
- (26) 『玉葉』仁安二年五月二三日条、『平範記』同月二三・二四日条。
- (27) 山城国田原郷山司陳状断簡（『禪』一三）、後嵯峨上皇院宣案（『禪』四六）。
- (28) 弘長二（一二六二）年の相論では、「富家殿人」は大石荘民とも呼ばれていた。奥山田と堺相論を繰り広げていたのは、大石荘民（大石殿人）であることがわかる。近江国大石・龍門両荘相論文書案（『禪』四九）。
- (29) 寿永三年四月六日源頼朝下文案（久我文書、『平安遺文』四一—五三号）、安元二年二月八条院領目録（内閣文庫蔵山科家古文書、『平安遺文』五〇六〇号）。
- (30) ①（弘長二年）近江国龍門荘雑掌言上状案（『禪』二三）。②弘長二年一月一七日近江国大石・龍門両荘民和与日記案（『禪』二四）。
- (31) 「石山寺年代記録」（石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』寺誌篇第一、法藏館、一九九六年）三一—二頁。
- (32) 禪定寺と曾束の相論については、小林前掲注（7）①論文に詳しい。
- (33) 延慶二年六月山城国曾束荘官百姓等重申状（『禪』三九）。
- (34) 『禪』五九・七九・八〇・八一。

- (35) 元応二年七月関白一条内経家政所下文案(『禪』八三)。
- (36) 延慶三年四月山城國曾束莊沙汰人百姓等重訴状(『禪』四一)。
- (37) 木幡住人との相論は、強盗・殺害といった刑事的事件である検断沙汰であり、史料②の藤原忠実住人の乱入という土地の帰属問題といった所務沙汰とは違うが、地域住人から荘園領主までの問題解決の仕組みは変わらないと考えらる。
- (38) 小保内前掲注(7)②論文、六二一六四頁。
- (39) (寛元三年) 禅定寺寄人等・山城国木幡住人等争訟文書案(『禪』一六・二〇・四二)。寛元三年一月二日平等院所司等申状案(『禪』一七)。寛元年間の藤氏長者政所については、高橋秀樹「鎌倉時代における藤氏長者の本所裁判」(『日本歴史』七五六、二〇一一年、二一四頁)に詳しい。
- (40) (寛元三年) 禅定寺寄人等・山城国木幡住人等争訟文書案(『禪』四二)。定舜奉書案(『禪』四三)。
- (41) 小林前掲注(7)②論文、六〇一六八頁。
- (42) 小保内前掲注(7)②論文、六〇一六八頁。
- (43) 佐藤健治「摂関家氏寺と御願寺」『中世権門の成立と家政』第三部第一章、吉川弘文館、二〇〇〇年、初出は一九九五年)二三五―二五四頁。樋口健太郎「摂関家「氏寺」の中世史的展開―法成寺・平等院を中心に」(『中世摂関家の家と権力』校倉書房、二〇一一年、初出二〇〇七年)三〇二―三三二頁。
- (44) 『殿暦』長治元年一〇月五日条。
- (45) 『玉葉』文治二年八月二九日条。
- (46) 『殿暦』天永二年九月一三日日条。
- (47) 『殿暦』長治二年一月二一日条。
- (48) 『殿暦』永久五年一月一一日条。
- (49) 『殿暦』嘉承元年正月一日・二月一日・三月二二日条。永久三年六月二一日条。
- (50) 『殿暦』永久五年一月一一日条。
- (51) 『殿暦』長治元年一〇月五日条。
- (52) 樋口前掲注(43)論文、三二四―三二五頁。
- (53) 樋口前掲注(43)論文、三二一―三二四頁。
- (54) 長寛三年法華堂領吳庭莊解(陽明文庫所蔵兵範記仁安二年秋卷裏文書、『平安遺文』三三四〇)。
- (55) 正和四年五月禅定寺寄人等重陳狀断簡(『禪』五五)。
- (56) 前掲注(36)史料。
- (57) 小林前掲注(7)①論文、二六二頁。
- (58) 前掲注(35)史料。
- (59) 藤木久志は、山野河海は、棲み分け的な場と説明する。村どうしは、その利益をナワバリとして自力保全し、その利益事実を持続的に維持しうるかぎりにおいて、そこに村の権力と慣行を「先例」として主張、上位の所有権に制約される下位の占有権とは別次元の概念とした。「村の当知行」は、自力で確保できるかぎり自らのテリトリーでありうると指摘する(①「境界の裁定者―山野河海の紛争解決―『日本の社会史』二巻、岩波書店、一九八七年、二二〇―二三四頁。②「村の当知行」『村と領主の戦国世界』東京大学出版会、一九九七年、一三三―一五三頁)。
- (60) 前掲注(33)史料。
- (61) 酒井紀美「村落間相論の作法」(『中世村落の形成と村社会』第三章、吉川弘文館、一九九九年、初出一九九一年、七二

禪定寺荘の領域画定と地域（朝比奈）

頁）は、村落の境界は、山の中に引かれた一本の線ではなく、路次のかたわらに打たれた一つの点として存在していたと指摘する。

- (62) 近藤成一他「荘園絵図調査報告一一」（『東京大学史料編纂所研究紀要』六、一九九六年、一二八頁）。

- (63) 「荘園絵図調査報告一一」では、「東ハタ田」「西ハタ田」であったが、文字観察により「東多田」「西多田」に訂正。「ケ口尾」は「二尾」とする（「前掲注（7）研究成果報告書二〇四頁」）。

- (64) 『宇治市史』五（一九七九年）二七八―二七九頁。

- (65) 前掲注（7）研究成果報告書、二〇七頁。

- (66) 窪田前掲注（7）論文、一三八―一四〇頁。

- (67) 酒井前掲（60）論文、六一頁。

- (68) 前掲注（30）①史料。

- (69) 前掲注（30）②史料。

- (70) （弘長二年九）十一月一日山司忠能書状（『禪』四八）。

- (71) 藤木前掲注（59）②論文・酒井紀美前掲注（61）論文は、当事者である双方の村だけ争う場合もあるが、近隣の村々の合力を得ると指摘する。また、荘園領主・在地領主がおりなす合力関係については、田中倫子「東寺の合力要請」

- （『山口芸術短期大学研究紀要』二、一九八八年）に詳しい。

- (72) （弘長三年九）正月一二日有綱書状案（『禪』四九）。

- (73) 勝俣鎮夫「戦国法」（『戦国法成立史論』、東京大学出版会、一九七九年、初出一九七六年）二三四―二三七頁。

- (74) （寛元三年）平等院鑑取友成申状案（『禪』二〇―三）。

- (75) 春田直紀「中世の海村と山村―生業村落論の試み」（『日本史研究』三九二、一九九五年、五八頁）は、荘園制的領域

支配の形成期は、領主による領域支配が、用益集団のナワバリを保全する。鎌倉中・後期になると、保全機能を喪失する。代わって、「生業の場」に即した権益保障を行うと指摘する。

- (76) 水野章二「中世村落と領域構成」（『日本中世の村落と荘園制』第一部第一章、校倉書房、二〇〇〇年、初出一九八五年、五二―五六頁）は、村落の領域構成を、①集落②田畠③近隣山④奥山、に分類。④に外枠を与えるのが、荘園公領制的四至であるとした。村落の関与があるのが近隣山で、日常的には用益することのない部分が奥山である。荘園領主の支配は、②の田畠までで、③の近隣山④の奥山は村落を介しての四至の領有であって、上級領主による安定的な領域支配は、住人・百姓の人的・空間的結合を基礎に実現していると指摘している。

（本学大学院文学研究科史学専攻博士課程後期課程）